

第3章 六甲山の将来像と基本的考え方

第3章では、第1章、第2章で整理した六甲山の森林の課題、本戦略に関連する神戸市の諸施策や六甲山の特性を踏まえて、今後100年を見据えた六甲山の森林の目指すべき将来像を定め、森林整備の基本的考え方を定めた。

(1) 神戸のまちの展望とめざすべき都市空間を支える都市構造

1) 2025年の神戸のまちの展望

第5次神戸市基本計画（平成23年2月策定）では、2025年（平成37年）を目標年次として、「創造都市（デザイン都市）の実現」、「市民・地域・広域それぞれの視点でまちづくりを進める」ことを神戸づくりのポイントとしている。

人口推計をみると、神戸市でも少子・超高齢化が進んでおり、特に顕著な動きとして、2005年（平成17年）から2025年（平成37年）を比較すると、65歳未満の人口が約20万人以上減少し、65歳以上の人口は約15万人近くが増加が予測されている。今後、少子・超高齢化、社会・経済のグローバル化、地球温暖化防止への取組み、地方の役割の重要性などの課題を踏まえ、「市民一人ひとりが能力を發揮するまち」、「人と人とのつながりを活かし地域が主体になるまち」、「新たな価値を創造し世界へ発信するまち」を基本的な視点として将来に向けたまちづくりを進める。

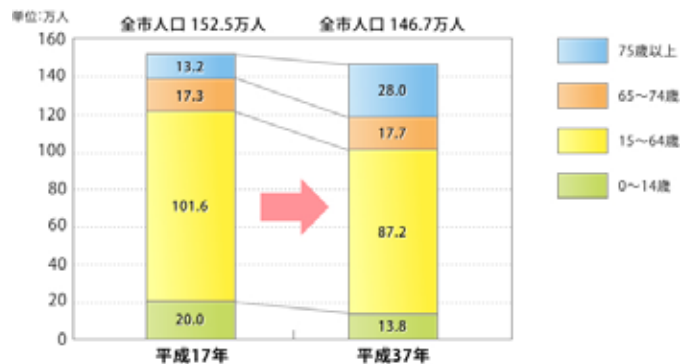


図48 神戸市の将来人口推計

注) 平成17年：国勢調査、平成37年：国立社会保障・人口問題研究所による中位推計

出典：第5次神戸市基本計画

2) 都市空間を支える都市構造

第5次神戸市都市計画マスタープラン（平成23年3月策定）では、めざすべき都市空間を支える都市構造として、神戸の骨格を形成する六甲山系などの緑地を「みどりのゾーン」とし、環境、防災、景観などに配慮した、豊かな自然環境を保全・育成することとしている。

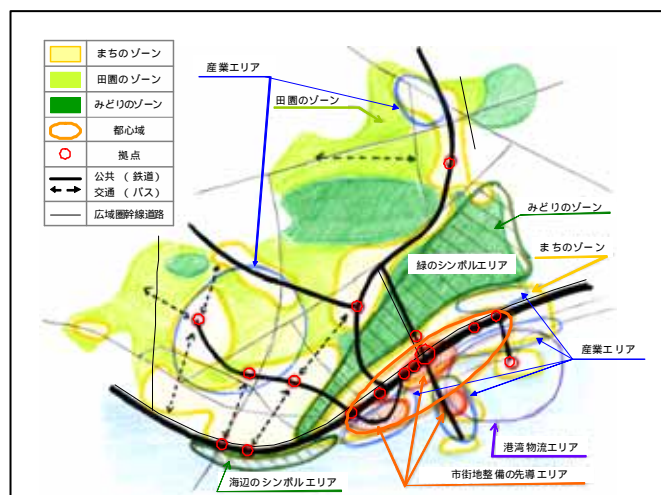


図49 神戸市の都市構造図

出典：神戸市都市計画マスタープラン

特に、神戸の都市空間を特徴づけている六甲山系を「緑のシンボルエリア」とし、豊かな自然環境や眺望環境を保全・育成するとともに、緑のもつ多様な機能などを活用した魅力的な空間づくりを推進する。

(2) 六甲山の森林整備に関わる神戸市の新たな施策動向

神戸市では、関連するそれぞれの計画において、六甲山の保全、整備、活用に関して下記のとおり位置づけている。

1) 神戸市緑の基本計画(2011年(平成23年)3月改定)

「緑とともに永遠に生き続ける都市=緑生都市」を目指して策定された神戸市緑の基本計画では、神戸市のもつ地理的・地形的な特徴やこれまでの緑に対する取組みの歴史、緑の現況などを踏まえ、「みどりのゾーン」、「まちのゾーン」、「田園のゾーン」の4つのエリアに区分している。

このうち「みどりのゾーン~いのちをまもり育む緑~」では、「六甲山系や帝釈・丹生山系など都市の骨格となっている緑を保全・育成・活用し、市民のくらしや自然環境、美しい景観を守る」を方針の第一とし、「六甲山の森林整備戦略づくり」、「みどりの聖域づくり」、「森林保全・育成の強化」、「森林を守り育てる仕組みづくり」、「在来種主体の森づくり」、「森林資源の活用と技術開発」、「六甲山系の景観の保全・向上」、「自然災害から人とまちを守る森づくり」、「森林レクリエーション施設の充実」を施策の展開方向としている。

また、「緑の戦略プロジェクト」では、「緑をまもり育て、未来へつなぐ『六甲山プロジェクト』」を掲げ、「六甲山森林整備戦略の策定」や「六甲山の保全・育成」、「民・学・産・行政による連携方策」、「バイオマス資源の活用」、「CO₂吸収源としての六甲山の機能強化」、「アダプトフォレスト制度」、「森林に関する人材育成」を取組みイメージとしている。



2) デザイン都市・神戸(2007年(平成19年)12月)

デザイン都市・神戸の取組みでは、「住み続けたくなるまち、訪れたくなるまち、そして、持続的に発展するまちをめざして、文化・教育にたずさわる人々や企業だけではなく、すべての市民が、神戸の持つ強みを活かし、デザインによって新たな魅力を“協働と参画”で創造する都市、それが『デザイン都市・神戸』である」として、「地域の個性を活かした魅力ある空間の形成を図り、にぎわいと楽しさにあふれ、市民がやすらぎやこころよさを感じられるまちをめざす」まちのデザインを進めるものとしている。このなかで、「六甲山や郊外のみどりをまもり、市街地のみどりをそだて、いかして、『やま』と『まち』とをつなぐとともに、市民主体の花やみどりに関する活動を支援し、『ゆとり』をつくりだしながら、『みどりの中に息づくまち』をつくる」とされ、六甲山とまちとをつなぐ取組みが重要であるとしている。



3) 神戸市環境基本計画(2011年(平成23年)2月改定)

神戸市環境基本計画では、望ましい環境像である「自然と太陽のめぐみを未来につなぐまち・神戸」の実現に向け、5つの基本方針(「低炭素社会」「循環型社会」「自然共生社会」)の実現、公害のない健全で快適な地域環境の確保、全ての主体の協働と参画)を定め、神戸らしさ(自然に恵まれている、みなと等多様な顔を持つなど)、地域特性(まち・田園・緑のゾーン)を活かした「緑のカーテンプロジェクト」の全市展開、六甲山における市民・事業者等と協働した森林保全・育成の推進、こうべバイオガス事業の更なる展開、未利用エネルギーの活用の推進など9つの先導的な取組みを打ち出している。

4) 神戸市地球温暖化防止実行計画(2011年(平成23年)2月)

神戸市の低炭素都市づくりに向けた計画である「神戸市地球温暖化防止実行計画」(平成23年2月)では、「六甲山森林整備戦略」の策定と計画的な取組みや市民・事業者との協働による森づくりの推進、CO₂吸収源など六甲山の持つ機能・資源の活用推進が取組み施策としてあげられている。また、計画の中期目標年である2020年度までに神戸市域において再生可能エネルギーの導入目標を10%以上としており、バイオマスエネルギーの導入のため、六甲山における森林整備に伴う発生材の活用が期待されている。

5) 生物多様性神戸プラン2020(2011年(平成23年)2月)

「生物多様性に配慮したまちづくりを進める」ため、「六甲山などの森をまもり育て、生きものを育み、健全な森の力で災害を防ぐ」ことを目標のひとつとしている。このなかで、「六甲山における市民・事業者等と協働した森林保全・育成」を重点事業とするとともに、「みどりの聖域づくりによる保全」、「六甲山系グリーンベルト整備事業」、「植林、里山整備に対する補助」、「六甲山・摩耶山エコツーリズムの促進」を継続事業として取組むものとしている。

6) 神戸市景観計画(2010年(平成22年)3月改定)

神戸市景観形成基本計画では、基本目標を「個性ある都市空間の発掘・創造(都市の顔づくり)」「生活環境の質的向上(アメニティの追求)」、「魅力ある産業環境の創出(都市環境の活性化)」、「歴史的環境の保全(伝統文化の再認識)」、「市民文化としての都市景観(市民意識の高揚)」を目標としている。

こうした目標のもとに、自然地域景観形成計画のなかで、「(1)自然環境の保全:六甲山系を中心とする自然緑地の保全」、「(3)眺望型景観の対象としての自然環境の保全:六甲山系あるいは海上から眺める神戸の眺望型景観は、市街地のたたづまいとともに、それをとりまく自然環境が一体となって形成されるものであり、眺められる対象としての自然環境への十分な配慮が必要である」としている。

さらに景観形成の対象として、「全山縦走路、毎朝登山ルート、各種ハイキング道路、山陽自然歩道、登山基地やレクリエーション開発拠点は自然緑地景観形成上重要である」としている。



(3) 六甲山の目指すべき森林の将来像と森林整備の基本的考え方

1) 六甲山の特性

六甲山は海に面した神戸の市街地と戦後開発された新市街地に囲まれた貴重な緑地であるとともに、北摂山系の山々につながり背後には丹波山地等に連なる山々を控えている。

六甲山は、里山として田園・農業を中心とした里のくらしとの関わりで維持されてきた森林であるが、近代以降、その関係が薄まったことによって森林が荒廃してきた。

今、「都市山」六甲山と人の暮らしとの新たな関わりを結び直すことが必要である。



図50 六甲山の空間的特性

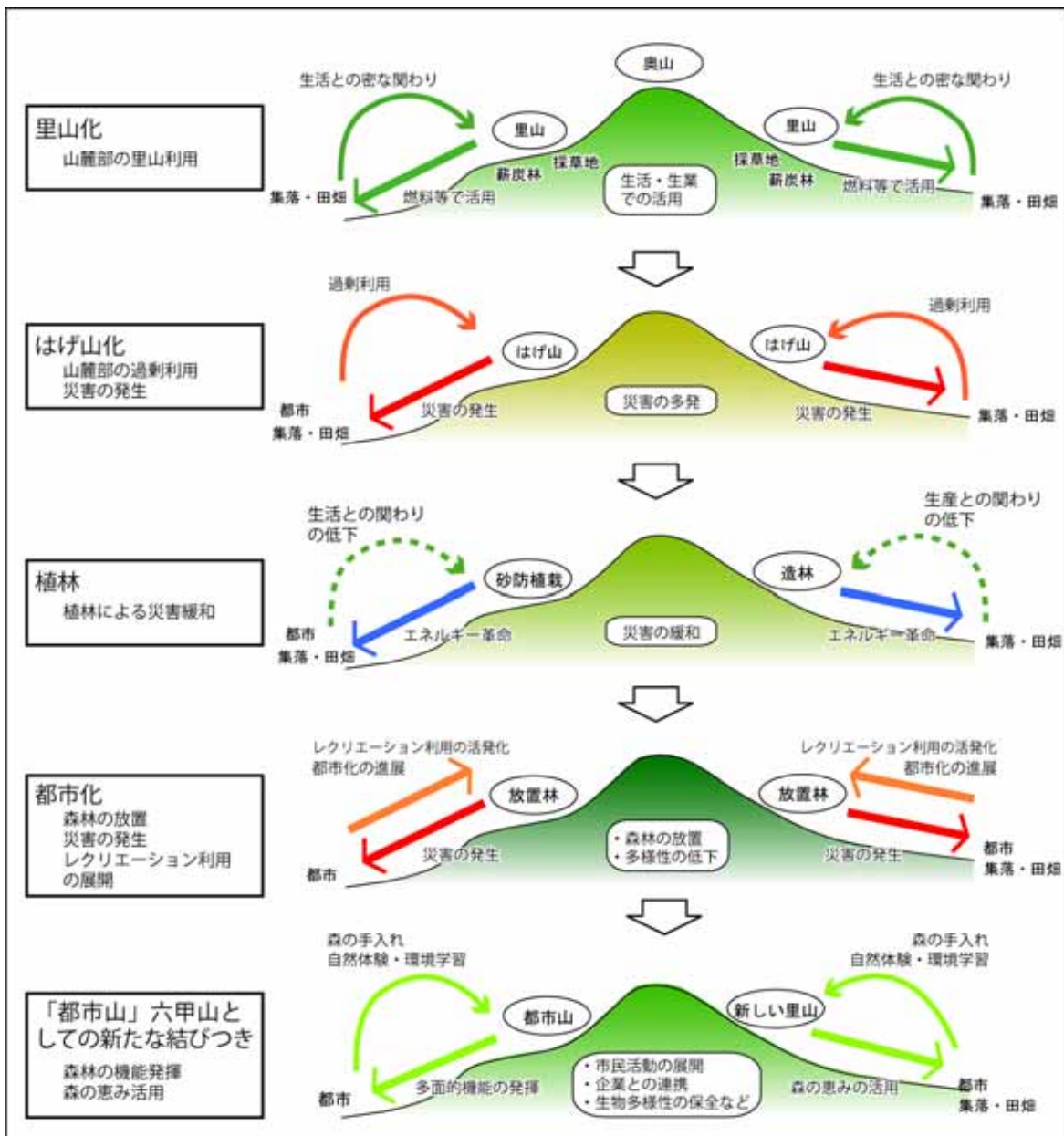
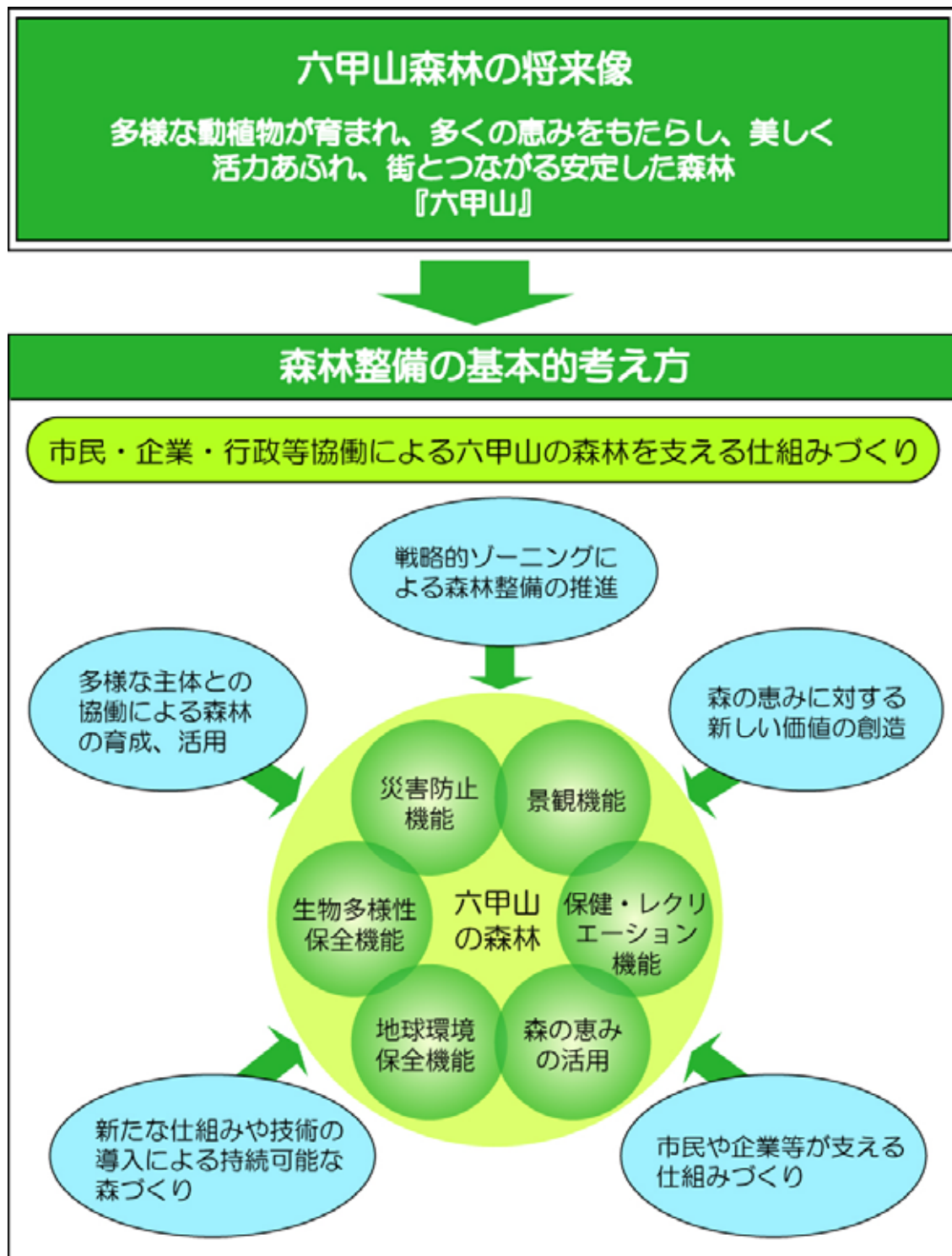


図51 六甲山の変遷からみた特性



2) 目指すべき将来像と森林整備の基本的考え方

森林に関わる全国的な動向、六甲山の現状と課題ならびに特性を踏まえ、六甲山の森林が有する多面的機能を十分に発揮するため、本戦略策定の目標である『「都市山」六甲山と人の暮らしとの新たな関わりづくり - 六甲山の「恵み」を「育てる」・「活かす」・「楽しむ」ための仕組みづくり』の視点から、私有林を含めた六甲山全体の森林の将来像を示すとともに、森林整備の実施に向けての5つの基本的考え方を、ゾーニングとマネジメントの2つの視点から、次のとおり設定した。

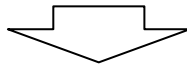


コラム：本多静六氏の講演とその後の治山事業

東京帝国大学教授の本多静六氏（造林学・造園学専攻）は阪神大水害直後の1938年（昭和13年）10月27日に神戸を訪れ、「治水の根本策と神戸市背山について」と題して講演を行った。当時73才の本多静六氏が70年前に講演した内容は、今日を予見したものであった。

災害の原因

- 1．多量の雨
- 2．六甲山の風化しやすい地質（花崗岩）
- 3．六甲山がはげ山であること
- 4．山腹が急傾斜であること
- 5．山頂部、山麓部の住宅、道路などの開発に伴う安全対策の不備
- 6．市街地河川や排水口の容量不足

**対策**

- 1．無立木地の造林
- 2．谷部に堰堤を設置
- 3．山頂の平坦部の新たな開墾を禁じ、樹林地とする
- 4．道路排水は必ず溪間に導く
- 5．重要な地区は、風致地区に指定し、下草落葉、伐採、土地の形質の変更などを制限
- 6．山麓と市街地の間に40m以上の樹林帯を設け、森林公園とする
- 7．市街地の河川は二重断面とし、河川幅の2倍以上の広さの低緑地帯を造り、低緑地帯は洪水時の河川となるよう整備する
- 8．地震と津波に備え、市街地に避難場所となる公園を設置、海岸線は住宅地になる前に緑地帯を造り、耐震、耐火建築物にするなどの都市計画の重要性（大地震とその後の豪雨災害対策）



水平階段を切り、苗木植栽のための鉢床をつくるため土を芝で固める



苗木を植栽



植栽完了



全景（神戸市須磨区東須磨青山）

出典：六甲山災害史：兵庫県治山林道協会